

話題化と否定要素前置：極小主義的見地から†

野 地 美 幸*

(平成5年10月29日受理)

要 旨

本稿では、英語の話題化、否定要素前置といった現象に対して、最近の極小主義の立場から、検討を行っている。英語の文構造には CP と AGRSP との間に話題要素の移動先として使われる TopicP が存在するという想定の下で、これらの現象が、話題要素と Topic 内にある [+Topic] という形態素性の照合のために生じる現象であることを示す。

KEY WORDS

topicalization 話題化 negative preposing 否定要素前置
minimalism 極小主義 feature checking 素性照合 economy 経済性

0. はじめに

Chomsky and Lasnik (1991), Chomsky (1992) で展開された極小主義の枠組みでは、移動はすべて形態上の要請によるものと仮定されている。ある要素が PF では解釈されない強い形態素性を含んでいる場合には PF へ入る前に、すなわち、可視統語論 (overt syntax) で、その素性の照合のための移動が生じる。また、PF では見えない弱い形態素性は、可視統語論で照合を済す必要がないので、経済性の原理の一つである先延ばしの原理 (procrastinate) により、移動は LF まで持ち越される。本稿では、話題化と否定要素前置もまたこうした形態上の要請によって生じている現象であることを見ていく。

1. これまでの分析

1.1. CP Spec 代入分析と IP 付加分析

話題化に関する分析は、移動先の違いから大きく二種類に分けられる。一つは、CP の Spec への移動とする分析 (Chomsky (1977), Vikner (1991) 等) であり、もう一つは、IP への付加とする分析 (Baltin (1982), Lasnik and Saito (1992) 等) である¹⁾。

この二つの分析の優劣を考えるにあたって、まず話題化に関する基本的なデータをいくつか見てみよう。話題化は、(1a, 2a, 3a) が示すように、wh-島、複合名詞句、that 痕跡等の効果を示す。

* 言語系教育講座

- (1) a. ??this book, I wonder who read *t*
 b. ??what do you wonder who read *t*
- (2) a. ??this book, I accept the argument that John should read *t*
 b. ??what do you accept the argument that John should read *t*
- (3) a. John, I think (*that) *t* read the book
 b. who do you think (*that) *t* read the book

また、(4a)が示しているように、話題化自体も一種の島を形成する。

- (4) a. ??what do you think that to Mary, John gave *t t*
 b. ??what do you think to whom John gave *t t*

こうした事実に基づいて、Chomsky (1977) は、話題化を wh-移動と同様の移動と見なしている。話題化を wh-移動と同様に CP Spec への移動と考えると、(5)のように、話題化が主節では wh-移動と同時に起こらないことも説明可能となる。

- (5) a. *To whom, this book, should we give *t t*?
 b. *This book, to whom, should we give *t t*?

(Chomsky (1977))

しかしながら、その一方で、埋め込み文では(6)が容認可能となることや²⁾、(7)が示しているように that 節内でも話題化が起こり、その場合、話題要素が that の右に位置することが問題となる。

- (6) he is a man to whom liberty we could never grant *t t*

(Baltin (1982))

- (7) a. I believe that this book, you should read *t*
 b. that this solution, I proposed *t* last year is widely known

(Lasnik and Saito (1992))

そこで、Baltin (1982) と Lasnik and Saito (1992) は IP 付加分析を提唱する。話題要素が IP へ付加していると考えれば、wh-句や that が話題要素に先行することが説明できるからである。しかし、依然として(5, 6)に見られる主節と埋め込み文の非対称性に関しては問題が残る。

1.2. PolP 分析

前節では CP Spec 代入分析と IP 付加分析を見てきたが、今度は Culicover (1991) の分析を検討してみよう。Culicover (1991) は、(8)のように、話題要素が否定要素や so 句である場合には、主語と動詞の倒置が起こること(それぞれ negative inversion, so-inversion)に着目し、

CP と IP との間にはもう一つ別の投射, PolP (polarity phrase), が存在すると主張する ((9))。

- (8) a. I said that not once had Robin raised his hand
 b. I said that so many people did Robin insult that he did not dare return home
 (Culicover (1991))
- (9) [_{CP} Spec C[_{PolP} Spec Pol[_{IP} ...]]]

(8) を CP Spec 代入分析の下で説明しようとする、Vinker (1991) がそうしているように、CP recursion を認めざるを得ない。また、IP 付加分析の下では、話題要素と主語との間に動詞が移動し得る位置が存在しないので、(8) は説明できないことになる。これに対して、(9) の構造を仮定すれば、(8) の否定要素と so 句は PolP の Spec へ、助動詞 had, did は Pol へ、それぞれ移動しているものとして分析される。Culicover (1991) では、この否定要素と so 句の移動は Pol として生起する [+Neg], [+So] という素性と Spec-Head の関係を形成するために生じると考えている。そして、その際に助動詞が Pol へ移動するのは、[+Neg], [+So] の接語 (clitic) としての性質が引き金となっているとしている。

一方、主語と動詞の倒置が起こらない話題化減少に関しては、次のような抜き出し可能性の違いを説明するために、Lasnik and Saito (1992) の IP 付加分析を支持する。

- (10) a. *these are the books which to Robin Lee will give
 b. these are the books which only to Robin will Lee give
- (11) a. *which books did Lee say that with great difficulty can she carry
 b. which books did Lee say that only with great difficulty can she carry
 (Culicover (1991))

(10, 11) は、話題要素に only が付くと、話題文の中からの wh-移動が良くなることを示している。Culicover は、(10a, 11a) の話題要素は IP に付加しており、(10b, 11b) の話題要素は PolP の Spec へ移動すると仮定して、文法性の差を説明しようとしている。まず (10a, 11a) では、IP 付加によって新たにできた IP が C によって category select されるために、元の IP が select されず、wh-句の移動の障壁となる。そして (10b, 11b) では、(はっきりとは述べられていないが) PolP も IP もそれぞれ C, Pol によって select されているので、which の移動は許されると考えているようである。このように、Culicover は前置される要素が否定要素や so 句である場合とそれ以外の場合とでは移動先が異なると考えているが、この主張に関しては 3.4 節で立ち戻って検討することにする。

最後に、(5) と (6) の差に関する Culicover の説明を簡単に見てみよう。まず、主節と埋め込み文とは構造上の違いがあり、主節は PolP, 埋め込み文は CP と仮定される。主節では [+Wh] という素性が Pol にあり、wh-句はこの Pol の Spec へ移動する。上で見たように、(5) の this book のような話題要素は IP に付加されるので、(5b) の語順は派生されない。また、(5a) は (10a), (11a) と同じ理由で、即ち、元の IP が障壁となって wh-移動が阻止されるために、排除される。これに対して (6) が可能となるのは、to whom が CP の Spec へ、そして、はっきりとは述べられていないが、liberty が否定要素等と同様に Pol の Spec へ、移動するからであろう³⁾。

埋め込み文で wh-句が Pol の Spec ではなく CP の Spec へ移動するのは、動詞等によって select されるのは Pol ではなくて C だからである。この移動は、C にある [+Q] という素性によって引き起こされる。また、埋め込み文で wh-移動が起こる際に主語と動詞の倒置が起こらないのは、この [+Q] という素性が接語的性質を持たないからである。

以上、話題化に関してこれまで提案されてきた代表的な分析を一通り見てきたことになる。本稿では、基本的なアイディアに関しては Culicover の分析を採用するのであるが、話題化現象を再検討するにあたって、修正を要すると思われる箇所を次の節で指摘することにする。

2. 文構造

2.1. NegP の位置

Culicover (1991) が提唱する (9) の構造上の PolP は、[+Wh] の指定を受けている場合は別としても、明らかに Laka (1990) で提案されている Σ P (Neg と Aff(irmation) の投射) に相当するものと思われる。しかしながら、 Σ P が英語で構造上 IP より上位に位置するとすれば、Laka が指摘したバスク語と英語の違いが生じない⁴⁾。例えば、(12) に示すように、バスク語では NPI (negative polarity item) が主節の主語位置に生起することが可能であるが、英語では非文となる。

- (12) a. Ez da inor etorri
no has anybody come
'Nobody came' (Lit: anybody didn't come)
b. *anybody didn't come

(Laka (1990))

Laka は、バスク語では Σ P が IP より上の位置に、そして一般に受け入れられているように英語では IP より下の位置にあると仮定してこのような違いを説明する。

本稿でもこの Laka の主張を受け入れる。そして、(13) のような否定文の否定要素と助動詞の移動に関しても、 Σ P が IP より下にあるという想定の下で、説明を試みる。この説明が適切でかつ可能であれば、否定要素が表面上何処に現われるにしても文構造の上で文否定の指定は一箇所済むことになり望ましい方向にあるように思われる。

- (13) a. I said that not once had Robin raised his hand
b. Not one word did I hear about the whole thing

(Culicover (1991))

ただし、次の二つの理由から、否定辞は NegP (Σ P) の head の位置にあるのではなく、Spec の位置にあると仮定する (cf. Pollock (1989), Chomsky (1991), Kawashima and Kitahara (1992))。第一に、英語で否定辞を越えての本動詞の移動が HMC (head movement constraint) に接触するなら ((14a)), 助動詞も否定辞を越えれば同じく排除されるはずであるが、

実際はそうではないからである ((14b))。

- (14) a. *John came not here
 b. John has not come here
 c. John cannot have come here

助動詞 have の元の位置が NegP よりも下にあるということは(14c)から明らかである。したがって、(14b)の has は確かに not を越えて移動していると考えられる。

第二の理由として、Rizzi (1991) で指摘された、(15)のような inner island 現象の問題が挙げられる。

- (15) a. Bill is here, which they (don't) know
 b. Bill is here, as they (*don't) know

(15a, b) はそれぞれ項、付加詞が否定辞を越えて移動しているが、(15)の対立は否定要素の存在によって先行詞統率が阻止されることを示している。ここで否定辞が NegP の主要部に位置するとすれば、(15b)の付加詞の移動が可能であることを誤って予測してしまう。(14b)や(15b)の文法性を適切に予測するためにも、ここでは、Rizzi(1990)に従って、否定辞 not は NegP の Spec にあると仮定することにする。

2.2. TopicP

前節で見たように、NegP が構造上 IP より下位に位置していると仮定し、(9)の構造を採らないとすると、(8)の否定要素や so 句は構造上一体どこにあるのだろうか。CP と IP の間には、名称は何であれ PolP のような、しかしながら [+Neg] の指定を受けない (つまり ΣP とは別の)、投射が存在することは明らかであると思われる。用語上の混乱を避けるために、ここではそのような投射を TopicP と呼ぶ。そして以下では(16)の文構造を仮定する。

- (16) [_{CP} Spec C [_{TopicP} Spec Topic [_{AGRSP} ... [_{TP} ... [_{ΣP} Spec Σ [_{AGROP} ... [_{VP} ...]]]]]]]]]

TopicP の Spec へは、否定要素や so 句のように倒置を引き起こす要素ばかりではなく、(17)の this book, to Mary といった話題要素も移動すると考える (Culicover (1991) の分析と比較参照)。

- (17) a. this book, John gave *t* to Mary
 b. to Mary, John gave this book *t*

この考えは(18)のような現象によって支持される。(18)は V2 言語の一つであるドイツ語の例であり、基本的には英語の話題化と同様に分析されるべきものと思われる⁹⁾。

- (18) Diesen Film haben die Kinder gesehen

'This film the children have seen'

(18)のように、ドイツ語では、否定要素や *so* 句以外の要素が前置される場合にも、動詞の移動を伴う。したがって、英語でも話題化と否定要素や *so* 句の移動とを移動先で区別する必要はなく、いずれも TopicP の Spec への移動と見なしてよいと思われる⁶⁾。

また、*wh*-句も一種の話題要素で、主節では TopicP の Spec へ移動すると仮定すれば、(5)と(6)の差も、主節と埋め込み文の構造上の違い(主節には CP の投射は存在しない)と *wh*-句の移動先の違い(主節では TopicP の Spec へ、埋め込み文では CP の Spec へ移動)から説明されることになる(1.2節で見た Culicover (1991)の説明と比較参照)。

3. 話題化と極小主義

3.1. [+Topic] と [+Neg]

前節で提示した文構造(16)に基づき、1節で見た話題化と否定要素前置の例を極小主義の考えに添って再検討してみよう⁷⁾。Chomsky (1992), Chomsky and Lasnik (1991)では、移動は形態上の要請によって駆動されると仮定されていることは最初にも述べたが、否定要素の前置も含めた一連の話題化の例を説明するために、ここでは [+Topic] と [+Neg] という形態素性を仮定する。[+Topic] は話題要素と Topic に、そして [+Neg] は否定要素と Σ に、それぞれ指定されており、少なくとも英語では次のように特徴づけられているものとする⁸⁾。

- (19) a. Topic の [+Topic] は強い素性である。
b. Σ の [+Neg] は弱い素性である。

まず、(19a)は(7)のような話題文を説明する。Topic の [+Topic] は強い素性なので、話題要素は可視統語論で TopicP の Spec へ移動し、Spec-Head の関係の下で素性の照合を行う。例えば(7a)は(20)のように分析される。

- (7) a. I believe that this book, you should read *t*
b. that this solution, I proposed *t* last year is widely known
(Lasnik and Saito (1992))
(20) I believe_[CP] that_[TOPICP] this book Topic_[AGRSP] you should read *t*]]

このように、英語では話題要素のみの移動によってこの素性は照合されるが、V2言語では、後で述べる理由により、Topic への動詞の移動を伴う。

次に、(18b)は(21)のような否定文を説明する。(21)の LF は(22)である。

- (21) a. no one knows him
b. John did nothing
(22) a. _[AGRSP] no one knows_[Σ P] *t*'_[AGROP] him *t*'_[VP] *t*

b. $[_{AGRSP} \text{ John did}_i [_{\Sigma P} \text{ nothing}_j \text{ t}'_i [_{AGROP} \text{ t}'_j \text{ t}'_i [_{VP} \text{ t}_i \text{ t}_j]]]]]$

Σ の [+Neg] は弱い素性なので、先延ばしの原理により、[+Neg] の照合は LF まで持ち越される。(21a)のように否定要素が主語の場合には、LF で動詞が AGRO と Σ を経由して AGRS へ移動し、Spec-Head の関係で素性照合が行われる。また、(21b)のように否定要素が目的語の場合には、目的語は一旦 AGROP の Spec へ移動して Φ 素性等の照合を済めた後で ΣP の Spec へ移動して [+Neg] の照合を行う。動詞の移動に関しては主語の場合と同じである。

3.2. 動詞の移動

前節では話題化文と否定文の例を取り挙げたが、否定要素前置の例に関して議論する前に、何が Σ や Topic への動詞の移動を駆動するのかを考えてみよう。 Σ と Topic 内には、AGR や T とは異なって、V 素性が存在しない。それゆえに Σ と Topic の Spec は non-L-related となり、いわゆる A' 位置として機能することになるのであるが、動詞が位置する積極的な理由がない。この問題は(18)に挙げた素性の照合のみならず、主節での[+WH]の素性の照合の際にも生じてくる。[+WH] もまた [+Topic] と同様演算子の持つ素性であって V 素性ではないからである。そこで、定形動詞は、それ自体照合を受ける要素であると同時に、[+Neg] や [+WH] など文の種類を決定する素性を活性化する役割をも担っていると考えてみよう。照合されない素性が残ればその派生は収束せず、それは定形動詞がその役割を完全に果たしていないことに起因する。したがって、定形動詞は自らの任務を果たすために移動するのであって、Greed に抵触することもない。

動詞が V 素性のない位置へも移動し得るということはこれまでも暗黙に仮定されてきたように思われる。(23)に示す Larson の二重目的語構文で、put が上位の V 位置へ移動するのは put という動詞の特性として ID (internal domain) を二つ取るからである。

(23) ... $[_{VP1} \text{ John } V_1 [_{VP2} \text{ the book } [_{V2} \text{ put on the shelf}]]]$

つまり、動詞移動の動機づけには、V 素性の照合だけでなく動詞自体の特性が深く関与していると思われる。

では、[+Neg], [+Topic] の各素性の照合の仕方をもう少し詳しく見てみよう。まず Σ にある [+Neg] は活性化しておらず、定形動詞が Σ に付加することによって初めて活性化し、照合に参加できるものとする。(18b)で仮定したように [+Neg] は弱い素性なので、定形動詞の移動もまた LF で行われることになる ((21)の説明を参照)。

一方、Topic にある [+Topic] は英語では活性化しているが、V2 言語では活性化していないものとする。そうすると、英語では [+Topic] の照合の際に動詞は Topic へ移動しないが ((7, 20)を参照)、V2 言語では必ず動詞の移動を伴うことになる ((18)を参照)。また、V2 言語でも話題要素は可視統語論で移動しており、[+Topic] は強い素性と考えられるので、V2 言語の動詞は可視統語論で移動することになる。

また、当然ながら V2 言語でも TopicP の Spec へ移動するのは話題要素のみである。(24, 25) は V2 言語の一つオランダ語の例であるが、(24)のように主語が第一要素になっている文では

主語の代名詞が弱形にもなり得るが、(25)のように目的語が第一要素になっている文では代名詞は弱形にならない。

- (24) a. Ik zie hem 'I see him'
 b. 'K Zie Hem
- (25) a. Hem zie ik 'Him, I see'
 b. *'m Zie ik

(Zwart (1991))

(25b)が非文となるのは、[+Topic]の指定を受けていない要素がTopicPのSpecへ移動しているために照合が適切に行われなからである。一方、(24b)が可能となるのは、主語がAGRSPのSpecに留まっているからである。

(24, 25)と似たような現象がドイツ語にも見られる。

- (26) a. Das Kind hat das Brot gegessen
 'the child has eaten the bread'
 b. Es has das Brot gegessen
 'he/she has eaten the bread'
- (27) a. Das Brot haben die Kinder gegessen
 'It's the bread that the child have eaten'
 b. *Es haben die Kinder gegessen

(Travis (1991))

(26)のように、文の第一要素が主語の場合は代名詞で置き換えることが可能である。しかしながら、(27)のように、文の第一要素が目的語の場合は代名詞で置き換えることはできない。(24, 25), (26, 27)に見られる対立は、V2言語で表面上V2の語順になっていても、文の第一要素がTopicPのSpecにあるとは限らないということを示している。あくまでもTopicPのSpecは話題要素が占める位置なのである。

ここで注意すべきことは、英語の話題化とオランダ語やドイツ語の話題化との間に見られる動詞の移動に関する相違が、Topicにある[+Topic]の違い(英語では活性化しているのに対してV2言語では活性化していない)から説明されることである。V2言語で定形動詞がTopicへ移動するのは定形動詞の特性として[+Topic]のような素性を活性化しなければならないからなのであるが、英語との言語差を生み出しているのは、語彙範疇の一つである動詞自体ではなくて、機能範疇であるTopicの相違なのである。これは、Fukui(1986)等で述べられている。語彙範疇と機能範疇の言語差に関する主張と一致する。

3.3. 否定要素前置と動詞の移動

では、これまでの議論を基に、否定文でもあり話題化文でもある(13)の否定要素前置の例を再考してみよう。(13)のLFに入る直前の構造は(28)である。

- (13) a. I said that once had Robin raised his hand
 b. Not one word did I hear about the whole thing

(Culicover (1991))

- (28) a. ...<sub>[TopicP not once had_i [AGRSP Robin [ΣP Σ [VP t_j [AGROP AGRO [VP raised his hand]]]]]]]]
 b. ..._{[TopicP [not one word]_i did_j [AGRSP I [ΣP Σ [VP t_j [AGROP AGRO [VP hear t_i about the whole thing]]]]]]]]}</sub>

まず話題要素（否定要素）の移動から見て行くと、(28a)の not once は [+Neg] の他に [+Topic] の指定を受けている。Topic の [+Topic] は強い素性なので、not once は TopicP の Spec の位置で PF へ行く前に照合を済まなければならない。(28b)の not once word に関して同じことが言える。ただし、付加部である not once が複合変形によりおそらく最初から TopicP の位置に生成されるのに対し、項である not one word は目的語の位置から移動する。

次に動詞の移動を見てみると、(28a)の had は、LF では消えてしまう要素なので、可視統語論で Σ, AGRS を経由して Topic へ移動する。Σ への付加は [+Neg] を活性化するためであり、Topic への移動は否定要素と Spec-head の関係を成立させてこの素性を照合するためである。(28b)の did も、(28a)の had の移動と同様に、可視統語論で Σ, AGRS を経由して、Topic へ移動する⁹⁾。

(28b)の否定要素と動詞の移動に関しては、一つ疑問が生じるかも知れない。というのは、否定要素が(28b)のように目的語である場合には、TopicP の Spec へ移動する際に ΣP の Spec を経由すればそこで [+Neg] の照合が行われ、動詞が Topic へ移動する必要がないとも考えられるからである。この [+Neg] の照合方法は動詞の Topic への移動がないという点で一見より経済的であるかのように見える。しかしながら、(18b)で仮定したように [+Neg] は弱い素性であるので、否定要素が可視統語論で ΣP の Spec への移動すれば、先延ばしの原理に抵触する。これは目的語の wh-句が可視統語論で AGRO の Spec を通って移動しないのと同じである。助動詞が LF で消えてしまう前に照合が行えるよう [+Neg] の素性を活性化し、否定要素と Spec-Head の関係になっていなければならないことと、否定要素自体の移動は別に考えなければならない。否定要素が助動詞のために一旦 ΣP の Spec へ立ち寄ることは Greed 違反となる。したがって、先延ばしの原理と Greed の両方の経済性の原理を遵守した形で(28b)の [+Neg] の照合が可能となるのは、先に見たように助動詞が可視統語論で Σ, AGRS を経由して Topic へ移動し、TopicP 内で否定要素と Spec-head の関係を成立させた場合のみとなる。

最後に、not を使った否定文(29)での [+Neg] の照合を考えてみよう。(29)は LF へ入る直前の構造である。

- (29) [AGRSP John did_i [ΣP not t_j [VP t_j ... [VP know the fact]]]]

did が Σ へ付加することによって [+Neg] が活性化し、ΣP 内で照合が行われる。did が語順の上で not に先行するのは、他の助動詞と同様に、可視統語論で AGRS へ移動するからである。

3.4. 残りの問題

1 節で話題要素を wh-島の中から抜き出すと下接の条件違反となることや ((1)), 話題化が

一種の島を形成すること ((4)) を見たが、このような現象が極小主義の枠組みでどのように説明されるかを見ていくことにする。

- (1) a. ??this book, I wonder who read *t*
 b. ??what do you wonder who read *t*
- (4) a. ??what do you think that to Mary, John gave *t t*
 b. ??what do you think to whom John gave *t t*

(1b, 4b)は、*what* が、空であれば立ち寄らなければならなかった埋め込み文の CP Spec の位置を經由していないために、最短連結の要件 (shortest link requirement) の違反として排除されるのであるが、(1a, 4a)も同様に説明される。(1a)の *this book* は埋め込み文の CP の Spec を、そして(4a)の *what* は TopicP の Spec を、經由して移動していれば、より短い連結が形成されたからである。

また、(30)の対立に関しても予測通りの結果が得られる。

- (30) a. ??which problem do you think that Mary, Bill told *t* that John solved *t*
 b. *how do you think that Mary, Bill told *t* that John solved the problem *t*
 (Lasnik and Saito (1992))

しかし、(31)のように、話題化と *how* の抜き出しが同一の節から行われている文の文法性に関しては問題が生じる。(31)は(30b)と同様に悪くなることを予測するが、実際には(30b)ほど悪くないからである。

- (31) a. ??how do you think that this problem, John solved *t*
 b. ??how do you think that Bill told Mary that the problem, John solved *t*
 (Lasnik and Saito (1992))

この問題の解決法を一つ示唆するとすれば、*how* が TopicP に付加された位置でも生成されると仮定することである。(31a, b)の *how* は話題化が起こっている文の TopicP に付加された位置で生成されたと考えれば、もはや TopicP の Spec を越えることはなくなる。これに対して、(30b)の *how* を一番深く埋め込まれた文内にあると解釈すると、やはり話題要素を越えた移動ということになる。

話題化に関するここでの分析にとってもう一つの問題となるのは、1.2節で見た次のような対立である。最小連結の要件は、(10b, 11b)が(10a, 11a)と同様に下接の条件違反を引き起こすことを予測するからである。

- (10) a. *these are the books which to Robin Lee will give
 b. these are the books which only to Robin will Lee give
- (11) a. *which books did Lee say that with great difficulty can she carry

- b. which books did Lee say that only with great difficulty can she carry
(Culicover (1991))

しかし、この対立があるからといって、話題要素と否定要素の移動先が異なるとするのは、他の言語との兼ね合いからしても、早計と言わざるを得ない。今の段階で言えることは、これまで TopicP の Spec も wh-移動の可能な中継地点として考えてきたが、可能な中継地点となり得る場合を制限する必要があるのかもしれないということである。即ち、TopicP の Spec に [+Neg] の指定を受けた要素要素がある場合には wh-句がたとえ [+Topic] の指定を受けていたとしても (2.2節を参照)、そこはもはや可能な中継地点にはなり得ないとするのである。そうすれば (10, 11) の対立を説明できるかも知れない。あるいはまた、(10, 11) の対立は動詞の移動の有無も何らかの形で関与しているのかもしれないが、この問題は今後の研究課題として残しておくことにする。

4. おわりに

本稿では、極小主義の見地から、V2現象も含めて話題化現象の説明を試みた。否定文に関しては、[+Neg] という素性を、Culicover が仮定したように構造上 IP より上の投射内に仮定しなくとも、 ΣP 内に指定しておくことによって説明されることを見た。また、動詞は自らも照合される要素であると同時に [+Neg] や [+Topic] の照合の際にも役割を果たしていることを示した。

註

- [†] 本稿は、『英語青年』第139巻第5号の掲載論文「話題化と素性照合」に加筆修正を加えたものである。
- 1) Chomsky (1977) は、話題化には空の演算子の Comp への移動が関与するという立場を取っているが、移動する要素が話題要素自体か空の演算子かという違いはあるものの、移動自体は今流に再解釈すれば CP の Spec への移動と考えられる。また、Baltin (1982) は、話題化を S への付加と考えているが、これも今流に再解釈すれば IP への付加と考えられる。
 - 2) Baltin (1981) は、(2) の文法性に関して、方言差が見られるものの、基本的に良くなると述べている。
 - 3) Culicover は、話題化には二種類 (topic topicalization と focus topicalization) あり、話題要素が焦点となっている場合、話題要素は Pol の Spec へ移動すると述べている。
 - 4) Culicover も、PolP が ΣP と細部にわたり非常に近いものであることを認めており、英語では PolP が I の補部としても、即ち IP 内にも、生起し得ると述べている。
 - 5) Vikner (1991) も、言語間の差異を最小にするために、このような分析を採り、V2現象と話題化現象のいずれの場合も CP の Spec への移動が関与していると主張している。
 - 6) 英語の話題化とは異なり、(18) のような V2現象で動詞の移動が起こる理由に関しては、

3.2節で述べる。

- 7) so 句の前置とそれに伴う主語と動詞の倒置に関してはここでは扱わない。したがって、今後の研究課題として残る。
- 8) [+Topic] という素性に関しては、Murasugi (1992) も V2現象の説明のために C にあると仮定している。
- 9) do 挿入の問題はここでは扱わない。do はある一定の環境で(26b)の t_j の位置に生成されると仮定する。

参 考 文 献

- Baltin, M. (1982) "A Landing Site Theory of Movement Rules", *LI* 13.
- Chomsky, N. (1977) "On Wh-Movement", in P. W. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press.
- Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation", in R. Freiden ed., *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press.
- Chomsky, N. (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MITOPL 1.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1991) "Principles and Parameters Theory", ms., MIT/University of Connecticut.
- Culicover, P. (1991) "Topicalization, Inversion, and Complementizers in English", ms., The Ohio State University.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, MIT dissertation.
- Kawashima, R. and H. Kitahara (1992) "Licensing of Negative Polarity Items and Checking Theory: A Comparative Study of English and Japanese", ms., Cornell University/Harvard University.
- Laka, I. (1990) *Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections*, MIT dissertation.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α* , MIT Press.
- Murasugi, K. (1992) *Crossing and Nested Paths: NP Movement in Accusative and Ergative Languages*, MIT dissertation.
- Pollock, J.-Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP", *LI* 20.
- Rizzi, L. (1991) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Travis, L. (1991) "Parameters of Phrase Structure and Verb-Second Phenomena", in R. Freiden ed., *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press.
- Vikner, S. (1991) *Verb Movement and the Licensing of NP Positions in the Germanic Languages*, University of Geneva dissertation.
- Zwart, C. J. W. (1991) "Verb Movement and Complementizer Agreement", ms., University of Groningen and MIT.

A Minimalist Approach to Topicalization and Negative Preposing

Miyuki NOJI*

ABSTRACT

In the minimalist program proposed in Chomsky and Lasnik (1991) and Chomsky (1992), it is assumed that verbs and nouns are drawn from the lexicon with morphological features such as Case and ϕ -features, and movements are driven by the necessity for these morphological features to be checked against an appropriate functional category. In the spirit of the program, I explore topicalization and negative preposing and give a unified explanation for them.

In the first section, several analyzations which have been proposed so far in the literature are introduced. In section 2, the basic clause structure of English is presented. And TopicP is postulated between CP and AGRSP, the Spec position of which can be occupied by a topic or a negative topic element. And in matrix clauses, wh-phrases can also move to the Spec position. This is why topicalization and wh-movement cannot take place at the same time in matrix clauses. And in section 3, it is shown that the strong feature [+Topic] in Topic triggers overt movement of a topic element with the feature. The negative element involved in negative preposing, which is assumed to be specified as [+Topic] as well as [+Neg], moves to [Spec, TopicP] in the overt syntax just as the ordinary topic element does. The only difference between topicalization and negative preposing is then whether the verb moves up to the Topic position or not. The difference can be explained by assuming that [+Neg] in Σ is weak in English.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages